

コミュニケーション能力の向上をめざした英語指導法の研究

—より創意工夫した音読練習を通して—

専門研究員 富樫昌克（川崎市立商業高等学校）

I 主題設定の理由

本校では平成 21 年度入学生（本年度 3 年生）までは 3 つの専門学科（商業科・情報処理科・国際ビジネス科）を設置していた。平成 22 年度入学生（本年度 2 年生）からは従来の 3 科を統合し、商業に関する専門教科と英語などの普通教科を総合的に学習していくという「ビジネス教養科」に学科改編した。現 1・2 年生は新カリキュラム、3 年生は旧カリキュラムでの学習形態となっているため、科目名、学習内容や使用テキストなどはカリキュラムの新旧によって相違があるが、そのことによる英語の定期考査の結果の差や英語を苦手だとする生徒の割合の学年差は見られない。多くの生徒は専門の商業科目を中心に学習をしており、英語は進路関係の試験や資格を取得するために学習している、ということが現状である。

一方、英語に興味をもっている生徒も少なくない。生徒たちに「英語の学習で身に付けたい力は何か。」と聞くと、多くが「もっと会話をできるようにになりたい。」と答える。そのための「発音指導」を充実させてほしいとの要望もある。また、毎年 2 年生の希望者が夏季休業中にオーストラリアでの語学学習体験¹（ホームステイ）へ参加しており「英語をきちんと話せるようになってから、もう一度行きたい。」「もっと勉強して、英語が上手になりたい。」などの感想が多く寄せられる。

また、近年は川崎市内の全市立高等学校へ外国語指導助手（以下、ALT）が配属されており、日本人の英語教員だけの授業展開とはひと味違った学習指導が可能となっている。また、インターネット等の普及により教材づくりのアイデアも比較的簡単に入手できるようになった。しかし便利になったからといって、教師は ALT やインターネットに頼る授業をしているだけではいけない。生徒の現状を把握して生徒の学習ニーズに合った適切な教材を提供できるのは授業担当者しかいないのである。

そこで本研究では、生徒が英語でコミュニケーションを図るために正しい発音をもっと多く学びたいという要望に応え、教師が既存の教材や方法に工夫を加え、単語の発音や文章にあった正しいイントネーションまでを含めた音声指導の有効な手立ての研究を進めていくことにし、研究の主題を次のように設定した。

コミュニケーション能力の向上をめざした英語指導法の研究

—より創意工夫した音読練習を通して—

II 研究の内容と方法

1 研究の方向性

「コミュニケーション」は広義に解釈すれば、非言語コミュニケーションも含まれるが、本研究では、言語（英語）を用いたコミュニケーション能力について考察していく。平成 25 年度より全面実施される高等学校学習指導要領では、外国語の目標の中に、「情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う」と示されている。

そこで本研究では、コミュニケーション能力の運用面として特に「情報を聞き取る力（以下、「聞き

¹ 勤務校の行事の一つで、平成 23 年度は 24 名が参加した。

取る力)」と「情報を伝える力（以下、「伝える力）」に焦点を当て、シャドーイング²という指導法を用いてこの二つの力を伸長することをめざしていくことにした。音読練習やリスニング練習の内容を工夫したり、そのような機会を多く生徒へ与えながら発音指導を行ったりすることが、生徒一人一人のコミュニケーション能力の向上へどのような効果をもたらすかを研究していく。

2 シャドーイングについて

シャドーイング自体は特に目新しい音読練習方法ではないが、模倣しながら読んでいくことで、発音する力や聞き取る力を効果的に体得できるという利点があり、玉井（2008）によるとシャドーイングは次の四つの効果³があると報告されている。

- (1) 英語を繰り返す技術の修得によって、一時的に頭に残る英語が増えて理解が正確になる。
- (2) 英語を物理的に発話するスピードがアップする。
- (3) イントネーションやストレスなど英語のプロソディ⁴をとらえる力が向上し、それに伴い、理解力と理解したものを表現する力がアップする。
- (4) 高い集中力を維持しながら聞く力がアップする。

本校の英語の授業では、テキスト本文の音読練習をする際に数回シャドーイングをして終了する程度であったり、シャドーイングを特に実践していない授業もあつたりする。生徒たちの中でシャドーイングによる音読練習の経験を重ねてきているものは少ないようである。

そこで本研究では様々な音読練習の場面で、今までよりもシャドーイングを行う機会を増やすこ

とにより、生徒の「聞き取る力（ネイティブスピーカーの話すリズムやイントネーションなどの英語の音声的特徴に特に注意をしながら聞くことができる力）」や、「伝える力（英語の音声的な特徴や読む速度を意識しながら情報を分かりやすく聞き手に伝えるように音読することができる力）」の向上をめざした。例えば、ペアワークの音読練習に加え、1人で音読をさせるような場合は、表1のようなシャドーイング練習を生徒の実態や授業展開に応じて組み合わせながら行った。

3 使用したリスニング教材について

授業でのリスニングにおいて、生徒はネイティブスピーカーの話すリズムやイントネーションなどに特に注意をしながら聞き、読む場面ではシャドーイングも取り入れながら情報を的確に理解できるように努めた。

実際に授業で実践したBBC放送の『The Flatmates⁵』（フラットメイツ）とCNN放送の『CNN Student

表1 様々なシャドーイングの練習方法

①パラレルリーディング
音声を聞きながらテキスト（原稿）を読んでいく方法。
②オーバーラッピング
テキストの英文を目で追っていくが、遅れずに手本の音声にぴったり合わせて読んでいく方法。
③プロソディ・シャドーイング
テキストを見ないでシャドーイングをしていく方法。意味を理解するよりも特にリスニングに意識を集中して真似をしていく。
④コンテンツ・シャドーイング
聞き取っている文章の内容も意識しながらテキストを見ないでシャドーイングをする方法。

*上記の①～④を行う際、小さな声で呟くような「マンブリング」や、口元は動かすが声を出さない「サイレント・シャドーイング」という手法がある。

2 同時通訳の練習法の1つで、スピーカーが話すのとほぼ同時に声に出して繰り返していく方法。

3 玉井健『決定版 英語シャドーイング超入門』コスモピア社 2008年 p.17

4 音の強弱・長短・高低、または同音や類音の反復などによって作り出される言葉のリズムのこと

News⁶』（CNN スチューデントニュース）の活用について、以下に示す。

（１）BBC 放送『The Flatmates』

BBC 放送が ESL⁷向けにホームページ⁸上で公開している『The Flatmates』というリスニング教材を使用した。1 話が約 1 分で完結するラジオドラマである。そのスキット⁹の対話文（図 1）を基に聞き取りの穴埋め問題を自作して使用した。手順は以下の通りである。

- 1 スキットを聞かせて穴埋め問題を解く。
- 2 問題の解答を行う。
- 3 繰り返しシャドーイングで音読練習をする。



図 1 The Flatmates のスキット

BBC の ESL 向けホームページ『The Flatmates』より

なおドラマ仕立てのストーリーのため、音読練習をするときに登場人物の心理状況も考えながら読むようにも指導した。さらにスキットの内容理解も深めさせるために、毎回のスキットに生徒のオリジナルのタイトルを考えさせた。

（２）CNN 放送『CNN Student News』

CNN 放送局が米国内の学生向けに放送しているニューステレビ番組『CNN Student News』をシャドーイング練習の補助教材として使用した。一つの話話が 1～3 分程度で終了するような短時間の題材を選び、それを二ヶ国語音声（字幕なし）で録画したものを授業で活用した。ある単語をクイズ形式で紹介したり、学校の紹介や進路学習的な題材等の学生向けの話題を多く取り上げたりするような内容であったため、生徒は興味をもって取り組んだ。活用例は次の通りである。

表 2 CNN Student News 活用例

<p>【活用例 1】 日本語音声→英語音声の練習パターン</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 日本語音声で視聴し、ニュースの内容把握をする。 2 英語音声に切り替えてもう一度視聴する。英文を聞きながら内容把握に挑戦する。 3 音読練習をする。 <p>【活用例 2】 英語音声→日本語音声の練習パターン</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 英語音声で視聴する。ニュースの内容理解に努める。 2 教師からヒントをもらいながら内容を考え、再度英語音声で視聴する。 3 日本語で視聴し、内容を正確に理解する。 4 プロソディ・シャドーイングまたはコンテンツ・シャドーイングで音読練習をする。
--

⁵ 「ルームメイトたち」の意

⁶ NHK（日本放送協会）の BS 放送でも視聴可能である。（平成 24 年 2 月現在）

⁷ English as a Second Language 英語を母語としない人のための英語教育のこと

⁸ <http://www.bbc.co.uk/worldservice/learningenglish/flatmates/>

⁹ 寸劇

4 研究の考察方法

(1) 生徒の「聞き取る力」、「伝える力」の調査方法

① 「聞き取る力」について

本校には各種英語検定の取得や検定取得に相当する英語力を身に付けることを目標にして、授業の中でリスニングテストの問題演習を多く行う「英語実務」という選択授業がある。この授業を選択している生徒を対象に前述のリスニング教材を活用し、話し手の言っていることを「聞き取る力」がどれくらい身に付いてきたかを調査した。授業内で聞き取りテストの演習を9月、11月、1月の計3回行い、その得点率推移を調べた。演習問題は、日本英語検定協会が公開している実用英語技能検定の準2級の過去問題を使用した。各30点満点で実施をし、調査対象数は11人であった。

② 「伝える力」について

「伝える力」を向上させる一環としてリーディングの授業で行っていた音読練習、そしてその結果を見る音読テストの得点率推移を調べた。授業ではリズムやイントネーションなどの英語の音声的な特徴や読む速度を意識しながら情報を分かりやすく聞き手に伝えるように読むための音読練習をさせ、表3にある評価項目と基準を生徒に事前に示してテストを行った。

表3-1 音読テストの評価項目

正確性（10点満点）	適切な区切りや抑揚など、文を読むときの決まりを意識しているか
発音（10点満点）	母音、子音など、単語の発音をきちんと理解して発音しているか
流暢さ（10点満点）	不自然に止めたりせず、自然に読めているか

表3-2 音読テストの観点の基準

10点	8点	6点	4点	2点	0点
大変優れている	優れている	標準程度である	やや劣っている	劣っている	かなり劣っている

*テストは6月、9月、12月の計3回実施をし、調査対象数は17人だった。

(2) 授業評価アンケートの利用

① 授業評価アンケートについて

生徒による教師の授業内容評価アンケートを前期（9月）と後期（1月）の2回実施した。内容は生徒から見た教師に対しての授業評価と、授業に対する自らの取り組み状況の評価である。このアンケートは本研究のために実施したのではなく、生徒が受けている全科目を対象として学校全体の取り組みで行ったものであるが、授業実践において「聞き取る力」、「伝える力」を伸長させた結果が、英語学習への意欲にどの程度影響を与えたのかを確認するために利用した。よって質問内容は特にコミュニケーション能力に関することに限定しているのではなく、授業全般に対する一般的な評価アンケートとなっている。質問数は全部

表4 授業評価アンケートの質問

質問1	内容が理解できるように取り組んだ
質問2	自分自身で考えるようにしていた
質問3	予習をして授業に臨んでいた
質問4	復習をして授業に臨んでいた
質問5	生徒一人一人が積極的に参加できる授業だと思った
質問6	自ら考えたり、自ら取り組んだりすることができる授業だと思った

で16問あったが、生徒の英語の授業に対しての積極性に関する部分や、前向きに授業に取り組めるような授業作りを教師がしているかに関する質問を6問抽出した（表4）。

これらの回答を調査することにより、コミュニケーション能力の向上に向けてさらに効果的な指導をしていくための参考とした。

②授業評価アンケートの回答方法

各質問に対して、1「そう思う」、2「ややそう思う」、3「あまり思わない」、4「思わない」から1つ選び、回答をさせた。94人を調査対象に実施した。

Ⅲ 研究のまとめ

コミュニケーション能力の向上をねらって言語運用能力の「聞き取る力」と「伝える力」に焦点を当て、シャドーイングを中心とした継続的な発音指導や音読練習をすすめてきた。本研究を経て、調査で使ったテストの結果から研究を整理し、成果と課題をまとめていく。

1 「聞き取る力」について

調査に使用したテストの平均得点率¹⁰（図2）は、聞き取りテストの結果に関しては、得点率はわずかな増加だけであり、「聞き取る力」について本研究では有効な結果を見いだすことはできなかった。これは音読練習の場合と同じ注意点である、「ネイティブの話すリズムやイントネーションなどに特に注意をしながら聞く」という英語の音声の特徴を意識する点において、教師からの具体的

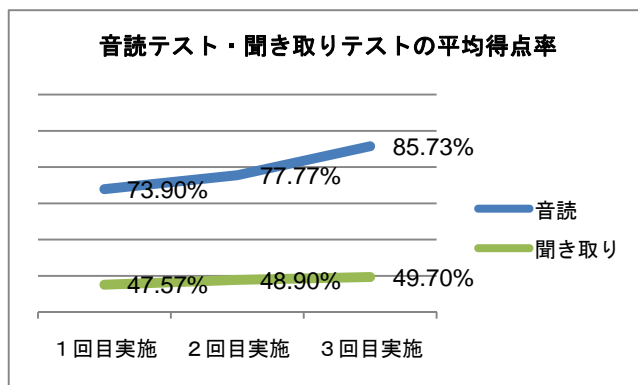


図2 音読テスト・聞き取りテストの結果

な資料の提示や手法の研究が足りなかったことが原因の一つとして考えられる。生徒が話し手となる音読練習の場面では、生徒が英語の音声的特徴を意識しているかを教師が聞き取って判断することができるが、生徒が聞き手となるリスニング練習においては、生徒が音声的特徴を意識しながら聞いているかどうかを教師がその場で判断することが難しかったからである。さらに、聞き取った音を意味のあるものとして理解するための生徒の語彙力や文章を系統立てて理解するための文法力をリスニング練習の根底に置きながら、「聞き取る力」を向上させていくためには、「伝える力」と比べるともっと時間をかけた継続的な実践も必要であると考えられる。

2 「伝える力」について

音読テストの平均得点率については大幅な上昇傾向が見られた。シャドーイングを中心とした継続的な発音指導や音読練習の結果、生徒の「伝える力」を向上させることにつながったといえる。音読テストの結果に成果が見られたということは、さらに授業実践に工夫を加えれば「聞き取る」の向上へもつながっていくのではないかと考えられる。そのためにシャドーイングによって培われた力をさらに伸ばすべく、今度は文章をただ音読させるだけではなく、聞き取ったことについて生徒同士が話し合ったり意見の交換をしたりするなどの統合的な言語活動が行われる授業についても研究をすすめていきたい。

また、本研究でシャドーイングを行った際、模倣できない（聞き取れない、または発音できない）語句が出てきても、その場では止めずにシャドーイングを続けていき、後で模倣できなかった部分を各自が再確認をして次の学習活動に入る、という方法を行った。これは本研究の対象ではなかったが、もし英語の発音力が基礎的な部分から定着していないまま入学してきた生徒がいきなりシャドーイングを行ったとしたら、数多く練習を積んでも効果は少ないかもしれないというデメリットも含ん

¹⁰ 1人あたりの音読テストと聞き取りテストの点数を満点が100%となるように換算した

でいる。このようなデメリットをなくすために、発音の基礎的な学習を必要とする生徒が効果的に学べたり、また発音の力が十分身に付いている生徒がさらに力を伸ばしたりすることができるような様々な生徒に対応した音読の練習方法を研究していくことも今後の課題である。

3 授業評価アンケートについて

図3の授業評価アンケートの分析結果を考察すると、特に「予習をして授業に臨んでいた」、「復習をして授業に臨んでいた」について肯定的に回答(=「そう思う」または「ややそう思う」)をした生徒が大幅に増加した。また、「生徒一人一人が参加できる授業だと思った」や「自ら考えたり、取り組んだりすることができる授業だと思った」についても肯定的な回答が増加した。

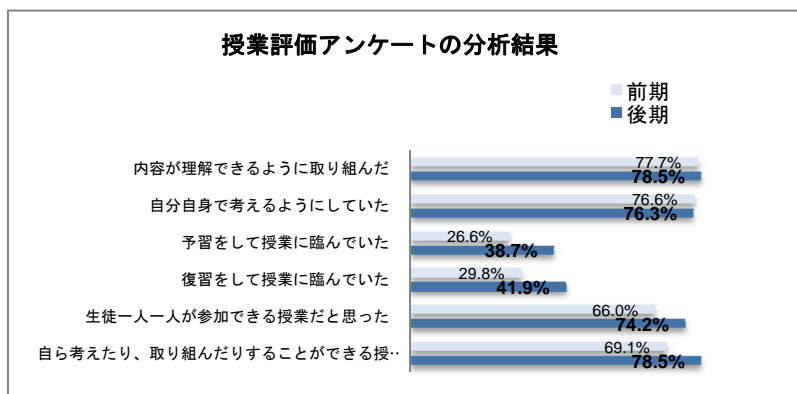


図3 授業アンケートの結果(「そう思う」、「ややそう思う」と答えた割合)

実際の授業中においても、教師の問いかけに対する生徒からの発話の場面が多く見られるようになったり、『The Flatmates』でオリジナルのタイトルを考えるという内容理解の活動で、独創的なタイトルを考え出す生徒が増えたりした。本研究の音声指導の授業実践が生徒の主体的な学習意欲へ好影響を与えたといえる。授業評価アンケートによって明らかになった生徒の主体的な学習姿勢が、「聞き取る力」、「伝える力」のさらなる向上へつながるように今後の実践に当たっていくことが大切である。

最後に本研究を進めるに当たり、ご指導、ご助言をいただいた川崎市総合教育センターの皆様、また在籍校の校長先生を始め学校職員の皆様に心より感謝し厚くお礼を申し上げます。

【参考文献】

斎藤 栄二『英語を好きにさせる授業(英語指導法叢書)』大修館書店	1984年
門田 修平・玉井 健『決定版 英語シャドーイング』コスモピア社	2004年
瀧沢 広人『教科書を100%活かす英語授業の組み立て方』明治図書	2005年
太田 洋『英語を教える50のポイント—Tips for English Teachers』光村図書	2007年
萩野 俊哉『英文法指導Q&A—こんなふうに考えてみよう』大修館書店	2008年
横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校 『各教科等における「言語活動の充実」とは何か —カリキュラム・マネジメントに位置付けたリテラシーの育成—』三省堂	2009年
横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校 『思考力・判断力・表現力等を育成する指導と評価』学事出版	2011年

【指導助言者】

川崎市総合教育センター指導主事	明瀬 正一
川崎市総合教育センター指導主事	安藤 勉